

近世諸藩の醫學教育

中 泉 哲 俊

序 言

題して『近世諸藩の医学教育』というが、これは、近世諸藩に設けられた医学校及び藩費に置かれた医学科を中心とする、諸藩の医学教育を意味することを、最初に断つて置きたい。従つて時代からいうと、明治維新以後設立の医学校や医学科は、この研究の対象とはならぬのである。

本稿に於て、私は近世諸藩に於ける医学教育の考察を試みようとするものであるが、医学教育の目的及び機能の解明に焦点を置きたいと思う。

一

近世諸藩に特設された医学校及び医学科を設置した藩の一覧表を未せば、次の通りである。

第一表 医学校創立一覽表

校名	藩名	創立年代	漢洋別
再春館	肥後、熊本藩	宝曆六年	記載なし
医学院	薩摩、鹿児島藩	安永二年	漢医
医学館	越後、新発田藩	安永年間	漢方
采眞館	筑前、福岡藩	天明四年	漢洋
医学所	備後、福山藩	同	漢法
医学所	出羽、秋田藩	同	漢法
医学所	出羽、亀田藩	同	記載なし
博洛館	豊後、岡藩	同	記載なし、但し藩賢は漢洋
医学館	紀伊、和歌山藩	寛政四年	記載なし
好生堂	出羽、米沢藩	同	記載なきも漢蘭か
医師学問処	阿波、徳島藩	同	漢洋
医学館	陸奥、会津藩	享和元年	記載なし
医学場	越後、長岡藩	文化五年	同
济世館	越前、福井藩	同	漢蘭、但し蘭
医学館	陸奥、仙台藩	同	記載なきも漢蘭か
医学館	伊勢、津藩	文政四年	記載なし
好生館	肥前、佐賀藩	天保五年	漢蘭、但し蘭

第二表 医学科設置藩一覽表

藩名	藩名	藩名	創立年代	医学科設置年代	漢洋別
医学所	下総、佐倉藩	同	七年	漢	蘭
医学館	常陸、水戸藩	同	九年	記載なし	蘭
好生館	長門、山口藩	同	十一年	漢	蘭
医学所	陸奥、盛岡藩	同	十三年	漢	蘭
沢流館	土佐、高知藩	同	十四年	漢	蘭
医学講習所	豊前、小倉藩	弘化四年	同	記載なし	蘭
医学館	日向、高鍋藩	嘉永初年	同	記載なきも漢	蘭
稽全館	日向、府内藩	同	七年	記載なし	蘭
医学所	周防、岩国藩	嘉永年間	同	記載なし	蘭
医学所	日向、延岡藩	安政四年	同	漢	蘭
医学局	豊後、日出藩	同	五年	漢	蘭
博采館	常陸、笠間藩	同	六年	漢	蘭
医学校	豊前、中津藩	万延年間	同	漢	蘭
四教堂	豊後、佐伯藩	安永六年	安永六年	漢	蘭
道学堂	越後、新発田藩	安永元年	安永元年	漢	蘭
長善館	出羽、亀田藩	天明六年	天明六年	漢	蘭
日新館	岩代、会津藩	寛文四年	天明八年	漢	蘭
維新館	肥前、平戸藩	安永八年	天明八年	漢	蘭
明倫堂	加賀、金沢藩	寛政四年	寛政四年	漢	蘭

明德館	出羽、秋田藩	寛政元年	寛政五年	漢医学
弘道館	近江、彦根藩	寛政十一年	寛政十一年	医学
稽古館	陸奥、弘前藩	寛政八年	寛政年間	医学
敬業館	陸奥、二本松藩	元禄年間	文化十四年	同
有造館	伊勢、津藩	文政三年	文政三年	同
崇広堂	同	文政四年	文政四年	同
集成館	相模、小田原藩	文政五年	文政五年	漢医学
時習館	常陸、笠間藩	文化十四年	文政六年	漢方医学
明教館	備前、松山藩	不詳	天保初年	医学
修道館	豊後、岡藩	享保十一年	天保三年	漢洋医学
教授館	土佐、高知藩	宝暦十年	天保四年	医学
總稽古所	大和、郡山藩	享保年間	天保六年	同
敬教堂	美濃、大垣藩	天保八年	天保八年	漢洋医学
日知館	駿河、田中藩	天保八年	天保八年	医学
弘道館	常陸、水戸藩	天保九年	天保九年	同
郁文館	常陸、土浦藩	寛政十一年	天保十年	同
成器堂	越前、勝山藩	天保十二年	天保十二年	同
成徳書院	下総、佐倉藩	寛政四年	天保十四年	同
明倫堂	越前、大野藩	天保十五年	天保十五年	同
好古堂	播磨、姫路藩	元禄四年	天保十五年	同
漢学所	出雲、広島藩	享和元年	天保十五年	同
遊焉館	豊後、府内藩	明和八年	天保末年	漢洋医学
明倫堂	日向、高鍋藩	安永七年	嘉永元年	医学
菁々社	石見、津和野藩	天明六年	嘉永二年	同
文武学校	信濃、松代藩	嘉永五年	嘉永五年	同

興讓館	周防、徳山藩	天明五年	嘉永五年	漢洋医学
弘道館	備後、福山藩	天明五年	安政初年	医学
尙徳館	因幡、鳥取藩	宝暦六年	安政元年	同
時習館	加賀、大聖寺藩	天保四年	安政元年	漢洋医学
正義堂	越前、福井藩	文政二年	安政三年	医学
敬業館	播磨、龍野藩	天保二年	安政三年	漢方医学
造士書院	上野、館林藩	弘化四年	安政四年	医学
成章館	肥前、蓮池藩	安永五年	安政六年	同
弘文館	肥前、鹿島藩	寛文年間	安政六年	漢洋医学
日新館	出羽、矢島藩	天明年間	安政年間	医学
明倫館	丹後、田辺藩	天明年間	安政年間	同
敬業館	播磨、林田藩	寛政年間	安政年間	同
作人館	陸奥、盛岡藩	寛永十三年	文久二年	漢洋医学
明倫堂	信濃、上田藩	文化八年	文久年間	医学
日新館	対馬、厳原藩	元治元年	元治元年	同
追琢舎	備前、足守藩	寛政四年	元治元年	同
修道館	安芸、広島藩	元禄年間	慶応二年	同
致道館	豊後、日出藩	天保年間	慶応二年	漢洋医学

(備考) 右の二表は日本教育史資料に基いて作成したものである。排列は医学校創立年代順・医学科設置年代順による。

右の二表を開設年代順に随つて地方別にまとめると、次のような結果が得られる。

第三表 医学校創立一覽表

創立年代	創立地方							
	奥羽	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
宝曆1751—1762							1	1
明和1764—1771								
安永1772—1780			1				1	2
天明1781—1788	2				1		2	5
寛政1789—1800	1			1		1		3
享和1801—1803	1							1
文化1804—1817	1		2					3
文政1818—1829				1				1
天保1830—1843	1	2			1	1	1	6
弘化1844—1847							1	1
嘉永1848—1853					1		2	3
安政1854—1859		1					2	3
万延 1860							1	1
文久1861—1863								
元治 1864								
慶応1865—1867								
合 計	6	3	3	2	3	2	11	30

第四表 医学科設置年代一覽表

設置年代	設置地方							
	奥羽	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
宝曆								
明和			1				1	2
安永	2						1	3
天明	2		1	1				4
寛政	1							1
享和		2		2				4
文化		3	4	2	1	2	2	14
文政			1					
天保			1		2		1	4
弘化	1	1	2	3	1		3	11
嘉永								
安政			1					2
万延	1							2
文久					1		1	2
元治					1		1	2
慶応								
合 計	7	6	10	8	6	2	10	49

即ち近世諸藩に於て設立した医学校三十は、総藩数二百十二藩（明治以前に藩費を設けなかった藩を除外）の一四パーセントに過ぎない。又医学科設置校四十九は、総藩費二百二十六校の二二パーセントに当る（中泉哲俊「日本近世」教育機関の研究）。なお藩費に於ける医学科と他の教科との採用関係を示せば、次表の通りであつて（中泉哲俊「日本近世」教育機関の研究）、医学は採用教科の第六位を占めている。

教科名	採用校数	百分比
漢 学	226	100%
習 字	127	56
皇 学	102	45
習 礼	99	43
算 術	98	43
医 学	50	22
洋 学	25	11
音 楽	6	3
調査校数	226	

〔備考〕 五校以下採用の教科は除外した。

併し医学は特殊学科であつて、特殊の立場にある学生のみが学んだものであるから、この数字を以て直ちに近世藩学に於ける医学の不振を速断する謬をおかしではならぬ。

右の表を先ず年代的に考察すると、医学校の創立も医学科の設置も共に江戸中期以後のことに属するが、前者に於ては天明・寛政頃、後者に於ては天保・安政頃が顕著であつて、こゝに幕府の官学医学科の発展充

実と深い関係のあることが明かに認められるのである。即ち幕府の医官多紀安元によつて明和二年（一七六五）に建てられた医学校躋壽館が、幕府の所轄に移つて医学館と改称されたのは、寛政三年（一七九一）である。医学館は初め主として旧式の漢方を教授したに過ぎなかつたが、官学となつて設備や校規の整備するにつれて洋方をも加え、我が国漢方医学界の中心勢力として、諸藩の医学校創設や医学科設置に大なる動機と刺激とを与えたことは、前掲一覧表の創立年代を参照すれば、自ら明かになるであらう。

次に地理的にみれば、医学校も医学科も共に九州地方に最も普及していたことが知られる。

然らば近世諸藩に医学校が設けられ、医学科が置かれるに至つた動機は何であらうか。

そも／＼多紀氏が医学館を創設した動機は、『浚明院殿御実紀』(『国史大系』(徳川実紀))によれば、「医術は人の生死にかゝれば、もし未熟鹿学の医多き時は、横天をまぬかれず……医学を興造し、教導に堪べき才力をゑらびて医政をさだめ、未熟のともがらをひきて、もはら習業せしめむ」ためであつた。諸藩に於ける医学校及び医学科設置の事情も、これと異なる所がない。諸藩に於ても、医術は「人命を預り大切の業柄」(『日本教育史』(資料)巻八)であり、医道は「司命濟世ノ重職ニシテ上君親ノ疫ヨリ下貧賤ノ厄ヲ療救」(『同書』(巻六))し、「好生ノ一端ヲ補助」(『同書』(巻八))するものであるという卓拔な識見をもつ、英邁な藩主が少くなかつた。然るに医師の中には「動モスレハ學術未熟ノ輩諂媚利ロヲ以テ葉ヲ売り候事ノミ目的トシテ医業ノ本意ヲ失フモノ少カラス誠以嘆ケ數次第」(『同書』(巻六))であつたから、藩内医術の拙劣を憂え、専ら医術を研磨せしめんが爲に、諸藩殊に大藩では競うて或は医学校を創立し、或は藩費内に医学科を設置して、医学の發達に大いに力を注いだのである。そのよい例を我々は熊本藩に見出す。同藩では藩主細川重賢が「夙に襲封の初より文武の道を振興し人材を養成して国家有事の場合に具へるために学校建設の必要を痛感せられ」(『宇野浩八、しん竹(岩造)藩学史説』)て、宝暦四年(一七五三)藩費時習館を創設したが、これで満足出来ず、「既に文武の館が創設され、領内の士風が大いに振つたとは言へ、文武備つて猶ほ医学の備はらないのを公は遺憾に思召され、殊に嬰兒の死亡率の多いのを憂へ、宝暦六年冬飽田郡古町村二本木に民家の空屋があつたのを修理して」(『同書』)開校したのが、医学校再春館である。

諸藩に於ける医学教育は、實に上述のような観点に立つて藩士及び領民の健康増進、利用厚生を目的とするものであつた。この爲に、本草学の泰斗平賀源内を招き、藥草園を設けて医学生に本草学を講習せしめ、藥草の栽培法・製

薬法を習熟せしめた米沢藩（「日本教育史」資料「巻三」）を始め、水戸・笠間・佐倉・会津・加賀・福井・福岡・熊本諸藩の如く、菜園を附設し、すぐれた本草学者を聘して、領内本草学の研究指導に当らせた所が少くなかつた。

然らば諸藩は、何故かくも争うて本草学を熱心に奨励したのであろうか。本草学はもと今日の薬物学に比すべきものであつたが、江戸時代に入つて斯学が盛んになるにつれて、その範圍が拡大せられ、「薬物のほか汎く動植庶物の名称・効用・来歴等を講究し、専ら物産を弁知するを以て目的とするに至」（宮土川藩「日記」本醫學史）り、謂わば博物学の性質を帯びるようになったものである。このように、当時の本草学は広く動物・植物・鉱物等を対象とし、これを薬物学・物産学の角度から研究した学問であつたので、藩内の物資を調査してその増産を計り、農政を指導し、領民の保健厚生策を立てる上に、極めて重要な基礎学であつたのである。

近世諸藩に於ける本草学の研究奨励は、実にこうした理由によるものであつた。そして農政方面から本草学を研究したものに、新発田・福岡・鹿児島諸藩があり、薬物・厚生方面から之を奨励したものに、水戸・会津・米沢・加賀の諸藩があげられる。天文・曆数研究の本旨が、藩内の農事指導にあつたことも、亦同じ趣意によるものである。藩士及び領民の保健を増進させる目的を達成するために、諸藩の医学校及び医学科は、凡そ次の二つの機能を営んでいた。

（一） 医学教育機関としての機能

医学校又は医学科が医術を研究してその進歩を図り、医師の子弟及び医師志願者を收容して、之が教育に当ること

を以てその主要な機能としたことは、医学校や医学科の本質上当然のことといわねばなるまい。が、毎年春秋二回医学頭の講釈の行われた際に、「藩内医事ニ関スルモノ出席シテ聴講」（「日本教育史」資料「巻三」）し、或は「藩主ノ医家子弟其他町医在医トモ混交シテ相切瑳シ」（同上）た出羽秋田藩、藩費致道館内に「医学局ヲ開キ封内ノ医員ヲ会

シ「医術ヲ研究セシ」(『日本教育史』(資料) 卷八) めた豊後日出藩、「封内医師三八ノ日ヲ以テ集会兼テ種痘術ヲ此ニ行」(上)つた豊後府内藩、「衆医相会シ問題ヲ以テ治術ノ巧拙ヲ試ミ又各自治療スル患者ノ現況ヲ衆議ニ附シ治方ノ良否ヲ討論」(『日本教育史』(資料) 卷八)した出羽米沢藩等の例が示すように、諸藩の医学校や医学科は、子弟教育という本来の任務の外に、自領内の医師への医学伝習機関乃至医術研究機関として、医術の進歩發達及び医師の素質向上に大なる貢獻をなしていたことは、疑う余地のない所である。

(二) 保健機関としての機能

1、治療機関としての面

医学校や医学科が、医学の研究に従つたばかりでなく、貧困な領民に対する施療をも擔当していたことは、注目すべき事実である。

豊後岡藩では、天明七年(一七八七)に医学校博濟館を設けるや、医師十五名を各村に配置して、医事の監督及び貧民の救療に当らせ(『同書』(同書) 卷八)、紀州和歌山藩では、天保九年(一八三八)医学館内に施藥局を設け、当直医や藥劑医を置いて、貧民には無料で藥品を給与している(『同書』(同書) 卷七)。殊に常陸水戸藩に於て、貧民に対して無料で施藥治療したばかりでなく、医師が時々村々を巡回して種痘を行い、又僻遠にして医薬に乏しい村落には予め之を配置して、村民の需用に充てた(『同書』(同書) 卷二)如きは、その最も代表的な例として挙げられる。

2、医事管理機関としての面

医師は「元來重キ人命ヲ司ル職」(『同書』(同書) 卷七)であつたにも拘らず、医者の中には、脈の案じ方や匙の持ち様も知らぬような無識無能の者さえ現れるという有様であつた。このため山口藩では、嘉永三年(一八五〇)医学所濟生堂を好生館と改称してその充実を図つた際に、次のような指令を發している。

医業ノ儀ハ追々被申出候通人命ニ拘リ候重職ニ御座候ヘ共却テ他業之通目錄免許ノ法律モ無之事ニ付從來ノ医家モ業術研究ノ心掛薄ク或ハ遊人ノ輩師伝モ不相受勝手次第ニ医者ト相成世上横行仕候者往々有之終ニ医道ノ衰微万人ノ不幸ト甚以歎ケ數次第奉在候畢竟ハ統領無之事ト被相考候諸国トモ医学所ト被相定候様相聞候源淵深ク候ヘハ支派正數ニ御座候此度医学所御造立被仰付候事ニ付御國中ノ医家一統風教渴仰御座候事ト奉在候医学統領処ト申迄ノ御威光ニ付置医家中業事向々就テハ自是差図被仰付候ハ、自然ト弊風一掃事業引立可申候此儀ニ付テハ別紙演說中ニモ書加申出候通ニ候ヘ共御創業ノ急務ト奉在候間猶亦別段申出候何卒第一ニ此御詮議被仰付可被下候事(同書 卷六)

他の諸藩もほど同様の事情に置かれていたものと思われる。従つてこのような弊風を刷新し、医道本来の面目を回復するために、医師の開業や治療に関する監督管理権を医學校に与えて、嚴重に取締らせた藩が少くなかつたのである。

例えば土佐高知藩では、天保十五年（一八四四）の触書に、

医風糾方ヲモ被仰付候上ハ医業一切ノ儀ハ医学館ノ可受差図事

是迄医業相当来候輩ハ格別新ニ医業ニ志候者ハ貴賤ニ不拘其支配々々へ願出右願相濟候ハ、時々医学館へ可届出尤治療相初候砌ハ医学館へ願出可受免許若無左時ハ決テ癰治不相成事

医家専門之外俗人トシテ世上致療治候儀向後屹度不相成事但郷浦等医師鮮候所柄ハ其旨支配方へ願出候ハ、医学館へ右願書差廻シ差支無之ニ於テハ於支配方詮議御免被仰付候事(同書 卷七)

と謳つて、新規開業や無免許治療や素人療法等に関する一切の監督権を、医學校に附与している。

又出羽秋田藩でも享和元年（一八〇一）に、

医術ハ人命ニ係リ至テ重キ事故職外ノ者苟且ニ医術ヲ施候事堅ク相禁候併民間医ニ乏シキ所以前ヨリ僧俗共医術ヲ学ヒ是迄療治ヲ致来候ハ、其所ニ於テ多ク治療モ有之モノハ其所ニテ精々吟味ノ上其支配エ申出其旨医学館エ可申出候尤去年中被仰付候

通新ニ医学ヲ致候者ハ於医学館御吟味ノ上其業許可成シ置カレ候間右ノ趣心得違無之様支配所村々ヘ可被申渡候(同書 卷三)

旨を布告して、医師以外の者の施療を嚴禁し、民間医の取締や開業希望者の吟味を医学校に一任し、藩内の内外科その他の諸科は勿論、産婆・灸鍼等医術に關する凡てを管理させたのである。

長州山口藩では「医業ハ司命濟世ノ重職タル事深ク御詮議被仰付御仁惠ノ御趣意ヨリ」(同書 卷六) 安政四年(一八五八)好生館を領内医業録所として、医事に關する一切を管轄させることとして、藩医・陪臣医・町医・村医等は悉くその差図を受くべきことを布告し、所謂もぐり医師の施療嚴禁、医業の取締、藥舗の監察に当らせたほか、各郡の医術の拔群な者を好生館御用掛に選任して、郡内の医学奨励を掌らしめた(同上)。

熊本藩再春館では「医術の發達を促進させる爲に、家臣町野玄壽に命じて医業監察といふものを設け、領内の医士を監督すると共に、治療中に変つた病患があつた場合には医案書を作製し、又普通の患者の統計をも作製せしめ、翌年の正月に必ず監察の許まで差出すやうに命じ」(字野哲人・乙竹 岩造藩学史談)、和歌山藩では領内各郡に平民医師から医事取締医を任命し、医学館学頭の管理の下に、領内一般の医事取締に当らせた(「日本教育史」 資料 卷七)。殊に肥前平戸藩に於て、藩医の指導の下に指定村医を置いて、産婦と嬰兒との爲に、出産前後の手当を無料で奉仕させたことは(岩波版 数 論 辭典 卷一)その社会的意義の深かつたことが察せられる。

上述のように、近世諸藩の医学校が、本来の任務とする医生の教育に当つたばかりでなく、その領民特に經濟的に恵まれぬ貧民や農民に対して投薬施療を行い、更に領内の開業医の監督指導機關として、或は医業・藥館の取締機關としての機能をも営んだことは、畢竟医学校若しくは医学科が、領民の保健厚生をその最も重要な任務とした精神の発露と考えられるが、同時に国家的統制政策のあらわれとも見られるであらう。

明治以前に医学科を設置した藩費四十九のうち、西洋医学を採用した藩費を前掲一覧表から摘記すると、次の九校となり、全体の一八パーセントに過ぎない。

設置年代	天	明	天	保	嘉	永	安	政	文	久	慶	応	合	計
名	会津、日新館		岡、修道館 大垣、敬教堂 府内、遊馬館		徳山、興讓館		大聖寺、時習館 鹿島、弘文館		盛岡、作人館		日出、致道館			
塾数	一		三		一		二		一		一		九	

(備考) 右は漢洋又は漢蘭と記されたものの数である。単に医学と記したものの中には、洋医学をも授けた所があるだろうから、洋医学採用校数は、実際にはこの数字よりも多いものと推定される。

又医学校三十のうち、洋医学を採用したことの確実なのは次の十校であつて、総校数の三三パーセントに該当する。

設置年代	天	明	寛	政	天	保	安	政	万	延	合	計
校名	福岡、采真館		徳島、医師学問所		盛岡、医学所 佐倉、医学所 山口、好生館 高知、沢流館		福井、済世館 佐賀、好生館 日出、医学局		中津、医学校			
校数	一		一		四		三		一		一〇	

このように近世諸藩の医学校及び藩費に於て採用した医学は専ら漢方医であつて、洋方を課した所は極めて少かつ

た。而も洋方の採用は、大半江戸末期に当る天保以後のことに属する。この事實は、時勢の推移につれてその必要が次第に痛感されるに至つたことと、幕府が官立の医学校に洋方を採用したことの影響とを物語るものである。即ち保守的な幕府は、嘉永二年（一八四九）外科・眼科を除いて蘭方を禁じたが、時代の進展・社会の必要には抗し得ず、安政五年（一八五八）蘭方禁制を解いて「和蘭医術之儀、先年被仰出之趣も有之候得共、当時広く万国之所長を御採用被遊候折柄に付、御医師中も有志之者は、和蘭医術兼学致し候而不苦候」（徳川実記）態度を示し、漢医学教授を旨とした医学館に洋方を採り入れたばかりでなく、万延元年（一八六〇）私設の種痘館を官に収めて洋方を教授し、又文久元年（一八六一）長崎に精得館を設けて西洋医学を実施した。このような幕府の措置と時勢の推移とは、必然的に諸藩の医学教育に反映せざるを得なかつたのである。

例えば備後福山藩では、藩主阿部正弘の天保年代から漸次蘭法医を採用し、（「日本教育史」資料）高知藩沢流館では慶應二年（一八六六）開成館中に医局を設けて、洋式医学を修めさせた（同書）。殊に阿波徳島藩では藩主峰須賀齊裕が西洋医術を貴び、医学校の生徒に蘭書を講じ、広く医学を研究させたばかりでなく、安政五年（一八五八）校内に洋方医学教授局を設け、「学生ヲシテ漢方医学ノ外猶主トシテ洋方医学ヲ講習セシメ且学生ヲ選拔シ長崎等ノ地方ヘ派遣シ其術ヲ研究セシメ」（同）、越前福井藩で安政三年（一八五六）御側御用人へ、「医学之儀従来漢方を以治療致来候得共近来医学追々相開必用有益之儀不少相見候間以来御医師之儀漢蘭兼学致候様被仰出」（同書）れ、又御匙医師へも、「治療之儀は実験を本旨と可致事に候得共漢蘭之差別なく広く相学ひ互に固執拘泥之念を去」（同）るべきことを申渡している進歩的な態度は、共に注目されてよからう。

福井藩の明進館科業目（安政二年制定）の中に、

蘭学科 我国制シテ西洋諸蛮独和蘭ノ通商ヲ許ス故ニ諸蛮ノ書我ニ航載スル皆蘭ニ依ラサルハナシ是ヲ以テ概シテ蘭書ト云而

シテ其教タル幕府ノ嚴禁學フヘカラサルコト知ルヘシ然レトモ彼天文学地理学軍学医学其他火炮船軍等民生ニ益アルモノ亦少ナカラス因テ其人ヲ選ンテ之ヲ學ハシム(同書 卷四)

と記してある。これによつて、單に医学のみならず当時広く洋学と呼ばれたものが、全く利用厚生を意図する実用主義の立場から採用され、教授されていたことが明かである。

医学科の学科は、概して教科に分れていた。日向高鍋藩医学学校では内科・外科・産科・眼科・口中科の五科に(同書 卷八)、会津藩医学館では本道科・外科・小兒科・痘瘡科・本草科の五科に(小川涉「会津藩教育考」)、秋田藩医学館では本科・外科・眼科・咽喉科・産科・針科の六科に(「日本教育史」 卷三)、和歌山藩医学館では診候・経俞・本草・運氣・外傷・内傷・婦人・小兒・瘡瘍・医案の十科に(同書 卷七)、山口藩医学学校では本草科・産科・咽喉科・小兒科・鍼治科・口中科・眼科・外科(但し元治元年に解剖・生理・原病・治法・薬性・本草・舍密の科目を設けた)の八科に分けて(同書 卷六)教授したものであつて、今日の医科大学さながらの觀を呈している。

それでは医学科の教科書として、どんなものが使われていたであらうか。盛岡藩医学所では素問・靈樞・傷寒論・金匱・溫疫論・十四經・医範提綱・内科新説・西医略説等(同書 卷三)、会津藩医学館では本草綱目・傷寒論・憂心懨々・十四經發揮・仲景全書・薬性歌・素問・靈樞・大成論・證治準繩・溫疫論・外台必要・千金方・千金翼方等(同書 卷一〇)を用し、徳島藩医師学問処では漢法に素問・靈樞・本草綱目・傷寒論・金匱要畧・難經・十四經・千金方・外台祕要方等を、洋法に医範提綱・解体新書・全体新論(以上解 親書)、氣海觀瀾・博物新篇(以上理 學書)、舍密開宗(化學 書)、遠西医法・名物考・衣篤児薬性論・和蘭薬鏡(以上藥 親書)、扶氏經遺訓・西医畧論・内科提要(以上法 同書 卷七)等を用いている。

他の医学校や医学科に於ても、凡そ右のような書籍が教科書として一般に採用されていたようである。が、中でも素問・靈樞・本草經・難經・傷寒論・金匱要畧などが重視されたことは、多紀元信の医庠諸生局学規(文久三

年)によつても察せられる。即ち

一、素問・靈樞・本草經及難經ハ、古医經ナレバ、最モ尊奉シテ研究スベキコト勿論ナリ、傷寒論・金匱要略ハ、古聖人遺方ノ存スル所ニシテ、儒学ノ六經アリ論孟アルガ如クナレバ、殊ニ熟讀玩味置カザルベキナリ(「日本教育史」
庫」學校篇文)

四

医学科の教授法は漢学の場合と大差なく、素読・講義・輪講・質問・会読等が一般に行われたほか、処方会をもつた所もある。

徳島藩医師学問処に於ては、漢方では二七・四九の日に素問・靈樞・本草綱目・傷寒論・難經等の講義を聴き、それが終つてから助講を始め学業のやゝ上達した生徒が列坐して、傷寒論・金匱要略・十四經・千金方・外台祕要方等の輪講・会読を行い、洋方では一六・三八の日に氣海觀瀾・医範提綱・内科提要等の講義を聴き、終了後博物新篇・扶氏經驗遺訓・西医略論等の会読をなし、或は舍密開宗・解体新書・遠西医法・名物考・和蘭藥鏡・窠篤児藥性論等の質問を行うのが常であつた(「日本教育史」
資料」卷七)。

秋田藩医学館では、産科・外科・針科・本草科等の諸会が行われた。即ち各科の会頭から医按(病氣の原因変化
等を問うこと)を出して生徒に処方なをさしめ、更に会頭から詰問疑難してその明弁を求め(同書
卷三)、生徒の實力養成に力を注いだ。小藩ながら出雲広瀬藩で最初句読を授け、その後生徒の学力程度を考慮して、講義・輪講・自読・質問等の順序で教授した(同書
卷六)ことは注目される。

殊に山口藩医学所規則に、

一、十七八才迄專一ニ儒学研究可致候第一ニ彝倫ニ明ニシテ義理ニ通曉シ易ク医ヲ学フノ基礎ナリ尤モ詞藻ニ耽リ本職ヲ忘却

不致候様肝要ニ候事(上同)

と規定し、和歌山藩医学館の規程に、

一、学医者当先修四書六經、以明聖人之道也、不明聖人之道、而暗孝弟忠信彝倫常行之道、雖五医經不能採其繙奥也、然此等書在學習館日々講読、則在此館不設其局、宜就彼而學焉(同書)

の一項を設けて、専門の医学を修めるに先だつて、先ず第一に儒學を専ら研究し、人倫の常道を明かにすべきことを共に論じている。これは必ずしもこの二藩に限つたことではない。かくの如く諸藩に於て、専門陶冶の基礎としての人間陶冶を極めて重視し、人間的教養の必要を力説していることは、儒教中心時代であつたとはいへ、頗る卓見であるといわねばならない。

藩費に於ける漢學の場合と同じように、医学科についても厳格な考試が一般に行われていた。考試には、定期と不定期との二つがある。盛岡藩医学所では、毎年春秋二回、素問・靈樞・傷寒論・金匱・溫疫論・十四經・医範提綱・内科新説・西医略論等の教科書のうち、各自の修めたものを講ぜしめたほか、別に治療法の問題をも課して(同書、その学力を試みる事が行われた。

又高知藩沢流館では、隨時二三名乃至七八名ずつ呼出して、傷寒論の上篇又は中篇を講義させて学力を試し、優秀な者には褒状を授与し(同書、卷七)、会津藩医学館でも小兒科・本草科に於ては方付(はうつけ、藥を盛ること)・医按などについて解答させたようである(小川涉「会津藩教育考」)。

元來藩費の「試験は藩が、藩士及びその子弟に要求したところの文武の教養の、注文通りに出来上つてゐるかどうかを測定する重要な行事で」(石川謙「石門心」)あつて、今日の国家試験的性質を帯びるものであつたことは、石川謙博士の夙に指摘された所である。医学校や医学科の試験も、同様な意味のもとに行われたものと解せられる。秋田藩医学館

では内科・外科・金瘡科・眼科・産科等それ／＼専門の書を修めさせて之を試験し、その後二三年の間実地修業に従わせ、施術の効驗のある者に限り、符驗を与えて患者の治療を許可する制をとつた（「日本教育史」資料「卷三」）。又水戸藩では領内の衆医を医学館に集めて考試を施行し、その優等者には葉撞や銀じなどを賞与することがあつた（佐藤謙三「日本教育史」）。
〔日〕

医術は人命に關する重要な業であつたので、医学生だけでなく、藩内医師の學術・技術を判定して、その開業に対する許否を与える権限まで附与された医学校のあつたことは、右の二例だけにとゞまらない。このことは、漢學と同じように醫學も諸藩に於て国家的統制を受け、藩の富強を意圖する国家的目的の下に經營されたことを示すものとして、我々の注意をひく所である。

結 語

以上、私は近世諸藩に於ける醫學教育を概観し、その教育形態や教育内容をほゞ明かにすることが出来た。そして戦場に於ける応急手当という立場から、医術一通りの心得が、武士に不可欠な教養の一つとされていた戦国時代（多胡辰）と異なり、近世諸藩の醫學教育が、むしろ藩士及び領民の健康増進・利用厚生に、その焦点をおいたものであつたことを知り得た。この故に諸藩の医学校は、必然的に藩内の施療機関として又医術研究機関乃至医事監督機関としての任務を有し、この限りに於て、藩運増強の遠大な意圖の下に經營されていたことを見て來たのである。

近世諸藩の醫學教育特に洋醫學は、醫學をも包攝する広い意味の洋學の採用及び發達と密接不可分の關係を保つので、藩費に於ける洋學教育の形態内容を究明することによつて、医学校運営の国家的意圖が、一層明瞭に浮かび上つて來るであらう。併しこの問題に關する考察は、他日に譲りたいと思う。